千刈狸の呟き

～猪　鹿　熊～

無 害 狸

本文のタイトルは今の日本の害獣トップ３である。安土桃山時代にルーツのある花札の役にあるのは猪鹿蝶である。花札に出てくる四つ足動物は猪と鹿だけで、日本では猪と鹿はずっと昔からなじみのある野生動物だった。しかし、これらが今では害獣として疎まれるようになっている。「シカト」は無視するという意味の言葉で、花札の絵柄で鹿がそっぽを向いていることに由来するが、昨今は鹿の被害をシカトできなくなっている。

野生動物による被害の報じられない日はないくらいだ。秋田に限ってみれば、害獣といえばまず熊だ。昨年、鹿角市で熊禍により４名が命を落としたニュースは記憶に新しい。最近の熊は個体数が増えたうえに人を恐れなくなってきたらしく、今年は人里どころか住宅地での目撃情報が多発し、人的被害も増えている。私自身も車の運転中、熊が猛スピードで前を横切り肝を冷やした経験がある。市街地に近い林道で、間一髪で衝突するところだった。かつては太平山前岳やその麓の筑紫森を一人で散策したものだが、熊のリスクを考えるともはや一人では危ない。退職後には改めてのんびり散策したいと思っていただけに、老後の楽しみを奪われた気がして残念だ。

農水省データ（2015）を参考に総合的に判断すると、害獣ワースト１は鹿で、次に猪、熊の順番かと思われる。農作物被害金額は、鹿42％、猪36％とこの２種でほとんどを占め、以下サル、ハクビシン、アライグマ、熊と続いている。森林被害面積は、鹿がダントツで３／４以上を占め、以下野ネズミ、熊、カモシカ、猪などとなっている。

鹿はその優しげなイメージと異なり、非常に貪欲だ。有毒・有刺の植物を除いてほとんどすべての植物を食べつくすといわれる。繁殖力が強く、全国で250万頭以上生息し、これは大阪市の人口に匹敵する。しかもさらに増加している。鹿の食害は、全国各地の森林景観や植物群落を様変わりさせるほど深刻で、昨今では尾瀬のミズバショウの花や茎も鹿の被害にあっているという。鹿がこれほど増えた原因は、温暖化、農山村の過疎化、肉や皮の需要減（ハンターの減少）、天敵のオオカミ絶滅などとされる。事実、米国のイエローストーン国立公園で増えた鹿を減らすため、絶滅したオオカミを95年にカナダから移送して放したところ生態系が回復してきたという報告もある。一方、秋田では昨年ついに白神山地で監視カメラに写った鹿（ニホンジカ）の姿が確認された。イエローストーンの件はもはや対岸の火事ではなく、対策が急務だ。

猪は田畑を徹底的に荒らすという。農地の被害面積は鹿の１／５以下と少ないのに、被害金額は鹿と大差ないのがその証左だ。猪は日本の大型哺乳類の中で最も繁殖能力が高く、年１回の繁殖で４～５頭を出産する。うり坊といわれるうちは可愛いがその約半数がいかつい成獣になる。人類最速のウサイン・ボルトより速い時速40キロ以上で走るうえ、数キロなら泳ぐこともできる。突進力は成人男性以上で、鼻で70キロの重さを持ち上げられる。さらに、犬並みの鋭い嗅覚と優れた聴覚を持っているという。熊ほどではないにしても、猪突猛進が止まらず人的被害をもたらすのでたちが悪い。これまで秋田県にはいないとされていたが、最近県南で目撃されている。猪と出くわす日も近いだろう。

ちなみに、2016年に地球上で最も多くの人間を殺した生物は蚊（マラリアなどで年間83万人）である。脊椎動物に限るとなんと人間（殺人、紛争などで58万人）で、蛇（毒などで６万）、犬（狂犬病で１万７千）と続く。地球規模でみると熊は番外で、ワニ、カバ、ゾウ、ライオンなどよりずっと安全ということになっている。なお、狸は話題になっていない。

前述のトップ３のみならず、今後、日本では他の野生動物も増え続け、被害もそれに比例していくと推測される。なぜ増えているかは諸説あるが、結局はその天敵として最強の人間が農山村で減少しているからだと思う。とくに秋田は人口減少率全国トップで限界集落も多く、野生動物にとっては住み良い環境になっている。

人間が減れば野生動物が増える、というのは自然の摂理で、日本とは逆に人口が増えている東南アジア、アフリカなどでは野生動物が減っている。この観点でみれば、獣害を減らす方策は人口が増加すること、とくに農山村地域に人が多く住むことだと思うが、もはや日本は昔のような状態に戻れるはずはないので非常に難しい。

保護動物と絶滅危惧種を守ることは大事である。しかし、いつまで続くかわからないが、今は人類が地球を支配している時代であり、人間を他の種から守ることが優先事項であろう。野生動物は一線を越え人間社会に侵出してきており、この待ったなしの現状に毅然と対処していくことが求められる。といっても、私が鉄砲担いで山を歩いても意味のないことで、まずは行政にお任せするしかない。

日本はテロや犯罪が諸外国に比べ少ないことは幸いだが、その反面、外から忍び寄るリスクを察知する嗅覚が鈍くなっているのは否めない。最近の鳥インフルエンザはじめデング熱のヒトスジシマカ、コンテナ船で入国するヒアリなど外来生物への対処は万全だろうか。深刻な被害をもたらしている野生動物に対しても、しかと対処してほしいものだ。